

2019年5月4日 創価大学オープンキャンパス

PASCAL 入試～体験 LTD

< 予習教材 >

* 5月4日オープンキャンパス用の予習教材です。実施日ごとに教材を指定していますので、参加する回の予習教材を必ず予習してください。

「ブロンズ像の問いかけと学習者の自立」

関田 一彦（創価大学 学士課程教育機構副機構長、教職大学院教授）

※著者の許諾を得て掲載しています。

ブロンズ像のメッセージ

創価大学で最も古い校舎、文系 A 棟の前庭には一対のブロンズ像が立つ。校舎入口に向かって左手には印刷工と天使が、右手には鍛冶職人と天使が、それぞれに学生の往来を見守っている。左手のブロンズ像の銘板には「英知を磨くはなんのため、君よ それを忘るるな」、右手のブロンズ像の銘板には「人生の価値は^{たから}労苦と使命の中に生まれる」と日本語と英語で刻まれている。中央教育棟が 2013 年に竣工するまでは、学生たちは入学から卒業までの間、このブロンズ像の前を何百回、何千回と行き来してきた。

開学から今日まで、学生たちが意識するしなにかかわらず、ブロンズ像は静かに問いかけ続けている。「今日は何を学びに来たの?」「学びは深まったかな?」「その学びをどのように役立てていくのかい?」あるいは「課題はできたかな、難しいからこそ挑戦のし甲斐があるだろう」「手を抜けば抜いた分、学びは浅くなり、成長の歩みは遅くなるよ」「努力し続ける人は負けない人だ。人生に無駄な努力なんて一つもない。天才とは努力の異名じゃないか」と語りかけている。

この一対のブロンズ像は、開学を記念して創立者から贈られた大学の至宝である。創立者が込めた思い、ブロンズ像に託したメッセージに思いを馳せるとき、創価大学を選び、創価大学で学ぶということの意味を創大生には幾度となく考えてもらいたい。

創価大学で学ぶということ

創価大学で学ぶ学生は、かりに誰かに強く勧められたとしても、最後は自分で創価大学への進学を決めたはずである。他の大学や教育機関への進学、あるいは就職、という選択肢は常にあったはずだ。入学した後でさえ、転学や退学は潜在的な選択肢であり続ける。義務教育段階とは異なり、就学を強制されることはない。どこで、何を、どのように学ぶのか、自らの持つ学習権をどう行使するか、最後に決めるのは自分である。

よく言われることだが、自分の人生の主人公は自分自身であり、人生という芝居の脚本家もまた自分自身である。大学生活とは、自ら描いたシナリオに沿って、大学という舞台上で自らが演じる、世界に一つだけのドラマである。むろん時には、演じ手の身の丈に依じて、あるいは環境の変化によって書き換えを強いられるかもしれない。それでも自分の理想や使命に向かって進もうと苦闘すること自体がすでにヒーローの生きざまであろう。

自らの学びを自らが律していく、自立した学習者として 4 年間の大学生活を送ってほしい。自立した学習者に育っていく過程で、創造的人間としての素養も磨かれていくに違いない。

学習者として自立するために

では、いかに自立した学習者となっていくのか。万人共通の方法はなかるうが、最近注目されている心理学的知見は参考になる。まず、自らの

成長可能性を信じること（能力観）である。そして、取り組みの仕方（学習方法）を点検し、適正な練習（努力）を重ねることである。これらについて少し説明しよう。

「人間の能力や才能は持って生まれたものであり、努力しても変わるものではない」という固定的な能力観を抱くと、自らの成長・変化に限界を感じやすくなる。実際は生得的な能力よりも継続的な努力の質と量によって、その取り組みや成果は異なってくる。

努力の質と量、といってもあまりピンとこないかもしれない。やみくもに頑張ればよい、というのでは生産性の上まらない残業を奨励するようなものである。習得しようとする知識や技能が専門的であり、複雑であればあるほど、その習熟に時間がかかる。様々な分野で達人と呼ばれる域に達するには、一般に1万時間（毎日3時間ほぼ休まず10年間続けると1万時間）ともいわれる長い修行が求められる。そこまで極端ではなくても、TOEICの点数を100点アップするのにもレベルによって100時間、200時間といった相応の練習時間が必要になる。

また、その過程でつまづきや行き詰まりを感じても、適切なアドバイスがあればそれを乗り越えて進みやすい。選手の成長やパフォーマンスがコーチや指導者によって変わるのは常識であり、それは学修においても同じである。ただし、それは指導者の力量以上に、指導者の指示をどれだけ正確に理解し実行しようとするかという学ぶ側の意思や姿勢で差が生じる。自分勝手に解釈して、自己流で練習しては、その量に見合った成果は上がりにくい。

そうすると、自身の取り組みが適切であるかどうか、点検し、必要に応じて修正することが大事になる。課題への取り組み方（学習や練習の方法）を適宜振り返り、自ら柔軟に調整する習慣を身につけることは、大学時代そしてさらに卒業後に続く学びの成果を左右する重大事である。

おわりに

ブロンズ像は、創価大学で学ぶ意味を自身に問うことを学生たちに望んでいる。何のために勉学に励むのか、答えを出すのは学生自身である。自立した学習者になることが最終の目的なのか。自立した学習者になるだけなら、創価大学で学ばなくても事足りるかもしれない。創価大学を巣立つその時まで、自らの中に答えを見出せる日々を過ごしてもらいたい。